

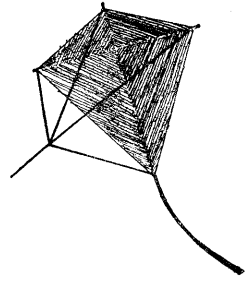
私の幼児教育論

— 送り手と受け手の間 —

(1)

発達論に関する研究会で「書物の社会学」のようなことが話題になったことがある。つまり、本の読まれ方の社会学（あるいは心理学でもよいのだが）ということで、その本に何が書かれているかだけでなく、どう読まれ、どう伝わるかが問題となったのである。

例えば、ある人が早教育の弊害を説いて、いくつかの具体的な英才塾を槍玉にあげたとする。ところが、何人かの読者から自分



山下恒男

の子どもをそこにかよわせたいので場所を教えてくださいと問い合わせてくる場合がある。このような場合、著者の意図がそのまま伝わらないとするならば、そうさせる社会的背景、あるいは読み手の側の事情というものを考えざるをえない。

ところで、以前私は、ある育児雑誌の編集者にむかって、「しつけの本というのは、読者の神経を逆なでするような、異和感を与えるものでなくてはならないと思います」と語って、彼女のひんしゆくを買った。読者の方にあらかじめある基準が存在していて、それに合致するものは読まれるが、合わないものは無視される、したがって、書き手が何かを伝えたい時には無視されない接

点が必要なのではないか、ということとその時私は言いたかったような気がする。

そういう意味では、「幼児教育論」といった標題を持つ文章は、特にそれが「しつけ論」的な内容のものであれば、はじめからいくつかの困難をかかえていることになる。「育児」あるいは「子育て」というものは人類が永年続けてきたので、多くの人がそれぞれの体験を持ち、「専門家」は無教にしていると考えてよい。彼らはみんな自分の「論」を持っているはずである。

にもかかわらず、特定の「論」が伝えられ、そして読者がそれに耳を傾けるとしたなら、それを可能にしているのは何なのだろうか？

一つには、それが「専門家」の権威というものかもしれない。読者はとりあえずはそれを読む。しかし、それがどれだけ読者に影響を与え、受け容れられているかということになると疑問もある。

そしてもちろん、「情報」の流し手は専門家に限られるわけではなく、文章化されていないものを含めるとそれは膨大なものとなるだろう。

社会心理学では「普及過程」といった研究領域があつて、ある地域で新しい作物の栽培を始めたりした場合、それがどのような

経路で普及してゆくかを調べたりしている。それと同様に、様々な「育児情報」の流れというものを明かにすることができるなら、それは「論」そのものの内容にもつと影響を与えることになるに違いないし、現在の育児のかかえている問題点も浮き彫りにされると思うのである。

(2)

専門家による「論」を考える場合、よく問題になるのは、「すぐれた研究者かならずしもすぐれた教師ではない」ということで、「理論」と「現実」の乖離が指摘されたりする。たしかに、私などの限られた見聞でも、児童心理学や青年心理学の大家と言われる人が、自分の息子に手こずっていたり、という類いの話はすぐに思い出すことができる。

けれど、このような考え方を押し進めてゆくなら、子どものいない人間は子どもについて論じる資格はない。ということになつてしまふだろう。

もちろん、両者で無関係であつていいということではないし、そもそもそんなことはあり得ないだろう。にもかかわらず、結果として生み出されてくる「論」は、一方に、論者の日常の此事、

自分の子どものエピソードなど中心にしたものがあるかと思えば、一方では、生活のにおいのまったく感じられない、ひどく冷静で第三者的なものもある。

これはおそらく、どちらがすぐれている、といった判断の対象になるものでなく、たんなる好みの問題でもないだろう。つまり「論」の内実、すぐれて思想的な問題と深いかかわりを持つものである。

心理学者のビネーやピアジェが、自分たちの子どもの観察をもとに理論構成したのは知られている。ビネーは『新しい児童観』の中で、マルグリトとアルマンドの二人の娘について言及している。浜田寿美男氏はピアジェについて、次のように書いている（『発達段階論で何が見えてくるか』、『発達』、第一巻二号一九八〇）。

「たとえば、ピアジェの『知能の誕生』という本を読んでみる。最初は、難解な理論と精緻な観察に、文字どおり度肝をぬかれる。しかし、よくよく読んでいくとまったく奇妙な感じが出てくる。この本は、ピアジェが自分の3人の子どもの観察をもとに、0-2歳までの精神発達を論じたものである。しかし、彼は、自分の子どもをまるごと観察したのだろうか。よく言えば、子どもを客観的に見ている。しかし、自分の子どもをこれほど突きは

なして冷淡に見ることが出来るものだろうか。そうした感じを抱かせるのはなぜであろうか。おそらく同書のなかでは、父親が父親として、母親が母親として登場することがまったくないからであろう。」

浜田氏の感想を肯定しつつも、父親としてのピアジェがつねに先行しているとしたなら、あのような理論体系は完成しなかったこともまた、容易に想像できる。

余談になるが、スウィフトが「アイルランドの貧民の子供たちが両親及び国の負担となることを防ぎ、国家社会の有益なる存在たらしめるための穩健なる提案」（二七二九）の中で、アイルランドにおける貧民の窮状を訴えている。彼は、貧民の子どもを食肉として供給するという少々グロテスクな「提案」をしているのであるが、「私の方になんら個人的利害感情はない」と言いつつ、「一ペニーの儲けをはかるうにも私にはそんな子供がいない。一番末は九歳だし、愚妻はもう子供をつくれる齢ではない」（山本和平訳）と、たとえ冗談にせよ、あの皮肉屋で厭人癖のあると言われる彼が、自分の側の事情に言及しているのも、何かほほえましい。もっとも、一生独身生活を続けたと言われるスウィフトにはたして本当に子どもがいたのかどうか私は知らないが。

それにしても、私たちが「子ども」を考える時、そこでの子どもは常にオトナ一般にとって子ども一般であるか、親にとっての自分の子どもである場合が多い。これ以外の可能性はないのだろうか？

そして、オトナの基準というのは、いつも「子どもではない私」であるのだ。けれど、例えば「いつもおなかをすかしていた私」というのはどうなのだろう。社会的には、オトナは子どもでもないし、子どもはオトナではない。しかし、たとえば今は飽食しているオトナであっても、おなかをすかしていた子ども」は私の中において完全に消え去ることはない。

私たちの子どもへの思い入れのなかには、このような領域のものも浸透しているはずである。だから、一見イメージションの世界のことがらのようでいて、実は現実の世界でもあるのだ。したがって、「私」が子どもに投射されたものが、私になっての「子ども」である場合も多い。そういう時、私の中の「専門家」や「親」は少し後退するようだ。

しかし、ともしれば、私たちはそのことを忘れて、子ども分り

パーセント、オトナ分一〇〇パーセントの存在として自分たちを規定しようとする時、必然的に私は一人の親(子どもがいない場合には一人の「おじさん」)であるか、オトナの一人にすぎなくなる。「子ども論」の総論の部分は「専門家」でもあるオトナとして、各論の部分は親としてふるまう。

このような使いわけというのは、専門家であれ、非専門家であれ、それと気づかずに行なっているものである。そういう意味ではオトナ同士はすべて共犯であり、オトナからのメッセージはいつもオトナに向けられる。

そして、オトナの中では体験が似ているもの同士が相手の言葉に自然と耳を傾けるような気がする。もちろん、ここでは思想や人生観、子ども観といったものは無視できないのだが、そこにさえ「体験」は影響を与えてしまっているのである。

だとすれば、ことさら私は「子ども観」という抽象的なものにこだわらなくなるし、自分だけ「オトナの一人」であることから逃げ出そうとしたりもする。だから、私が太宰治の「子供より親が大事と、思ひたい。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えてみても、何、子供よりも、その親の方が弱いのだ」(「桜桃」という文章が好きだと思ふのも、私の「幼児性」のゆえだけでなく、しばしば現実にそぐわないオトナと子

もの固定した役割の逆転を願っているからでもある。

(4)

しかし、私にしても二人の男の子がおり、現実の生活は続いている。オトナでもなく子どもでもない中途半端な存在としてあり続けたい私も、容赦なく私の空間に飛び込んでくる子どもたちからいやおうなくオトナであれと迫られる。それと意識しないで接する多くの局面だけでなく、何らかの判断を迫られる場合もある。

— そのような判断をつなぎ合わせていくなら「私の幼児教育論」が見えてくるはずなのだろうが、私自身にはさっぱり言語化することは出来ない。そしてまた、する気もない。

こうすると私が困る、不快になるというものは一方にある。そういう場合は、私の個人的事情や好みを出来るだけ率直に語るようにしている。こうすると、あるいはこうしないと子どもが（近い将来）こまるのではないか、と思うこともたしかにある。それは私に對してかなりの強制力を持っている。そして、私は時に矛盾した行動をとる。しかし、依然として私は行きあたりばったりの、しつけどもいえぬしつけに居直っている。それは、私が怠惰

であるということだけでなく、計画的、系統的なしつけに信頼を置いていないからであるかもしれない。

子どものイメージを一つのものとして一般化しようとする志向は、子どものしつけ、教育というものの「客観的方法」を確立しようとする要請と軌を一にしている。

しかし、このようなことの結果としてアウトップされる「論」が非常に狼狽な状況を無視した所で生産されてくることは言うまでもない。そのこと自体が悪ではないにしても、それがしばしば現実の生活を抑圧するものであることは承知しておくべきだろう。

— そして「論」の中身の検討は、それを生み出す側の事情、その伝達する経路を含めてなされねばならない。けれど、「論」や「情報」を必要とする人間の方に切実さがあるのはいうまでもない。

そうしたことも関連する試みとして、一九八〇年秋の教育心理学会で、冒頭にふれた研究会が中心となって、自主シンポジウム「発達研究と現代社会(2)——子育てと育児書をめぐって」がもたれた。この時司会をした私は、比較的漫然と話を聞いていて、いまここでその時の様子を再現するつもりはない。

ただ、発題者の一人である雑誌『ベビーエイジ』編集部の方

洋子氏の話を紹介しておこう。彼女によれば、育児雑誌登場の社会的背景として、

①核家族化により、世代間の育児知識（経験・コツ）の伝達が断たれた ②出生率の減少により、母親に育児経験が少なくなり、一方時間の余裕ができた ③地域社会の機能低下にともない、育児情報を交換する場がない ④高度経済成長、学歴社会化の進行する中で子育ての重要性が増大した、ということがあげられるという。

そして、『ベビーエイジ』が、「私の立派な母親がわり」と書いてきた三二歳の母親の話を紹介していた。つまり、母親（おばあちゃん）の不在を埋めるものとして雑誌が期待されているのだが、それはたんなる知識ではなく、自分一人が「未熟な母親」ではないと思ひ込める同じような仲間とのつながりを求めている、現代に生きる私たちの孤独さをあらためて示しているように思える。

だから、そこで求められているのは学者の理論ではなく、似たような状況にある人々の体験記なのである。にもかかわらず、学者の論が無用のものとして斥けられる気配もない。それはどういうことなのか。

(5)

今まで幼稚園や保育園で行なわれているやゝ組織的な教育にふれてこなかった。

私は幼稚園等で行なわれている保育や教育のしくみや内容について特に知識を持っていないのだが、実際の保育や教育に、「幼児心理学」や「保育学」「児童学」等がどの程度の影響を与えているのか興味がある。

それは、私が「教育心理学」が実際の教育上どの程度影響を及ぼしているのかについて関心を持ってきたせいでもある。そして、これらの「効果測定」は非常に困難ではあるが、現代の教育のあり方そのものに「学」への要請が内在しているように思われる。

つまり、現代社会における教育の二重構造というものである。

一方に組織的、系統的な公教育というものがあり、一方に個人的、私的な家庭教育が存在する。そして、両者の間のギャップはますますひろがっているようにも思えるのだが、実際には、学校部分が肥大していて、家庭教育が学校教育に従属していると言つてよい。

学校で行なわれる教育は、ますます画一化され、抽象化の度を深めている。そうした中で、教師による生徒一人一人に着目した実践報告がことあたらしく評価されたりするのも、学校という場における「生活」部分の衰弱の兆しでもあるかもしれない。

私たちのおかれている状況は千差万別であり、そこにある情報が与えられても、それを無視することを含めて、アウトトプトさされてくる「現実」の姿は無数にある。それゆえ、子どもの一人一人のおかれている状況を無視して、「上」からおろされてくる画一的な「教育論」に対する批判は必要である。

しかし、公教育が管理を強めてゆく一方で、家庭にはたてまえとしての「自由」がある。ところが、私たちはその自由の中で不安となり、あたかもE・フロムの言うように「権威」を求めてみずから縛られようとする。

だからこそ、不安定で自信のない私たちの現実を、「論」にからめとられることなくそのまま突き出す必要がある。とはいえ、育児体験のようなものを含めて、体験や生活の重要性を強調する立場に基本的に共感しながらも、問題を感じないわけではない。

それは、一つ一つの状況を、あるいは現実を見ていくうちに、それぞれの立場を反映した「体験的教育論」の必然性のようなものを感じてしまつて、結局すべての現状を肯定してしまふ多元論

におちいつてしまふのではないかという不安である。

だから、現実に学び、生活者であることにこだわるといふことだけでなく、時に「現実」や「生活」とはまったく異質な次元から衝撃を与える「理論」や「幻想」も必要ではないかと思う。それが私が一概に「空想空論」を否定しない理由である。

(茨城大学)

訂正

二月号(佐藤文字氏「ひとつの推論」)に間違いがありましたので、次のように訂正させていただきます。

P5・6上段

ステイプンス↓ステイプンス↑

P5上段17行目

いく程度で↓いく過程で

P5下段11行目から12行目

問題の解決についての方向性のような……

問題の解決について方向性が示されていることが必要です。前述のような……